

女子大学生におけるゆるし (forgiveness) と成人愛着スタイルの関連 — 共感性と自尊感情に着目して —

The Relationship between Forgiveness and Adult Attachment Style
in Japanese Female University Students
: Focusing on Empathy and Self-Esteem

今 村 友木子¹⁾

Yukiko IMAMURA

中 村 香 恵²⁾

Kae NAKAMURA

I. 問題

近年、海外を中心にゆるし (forgiveness) に関する実証的な研究が注目を集めている。我が国でも日本語版に翻訳され、独自のさまざまな尺度が開発されるなどして関心が高まってきている。しかし、その定義には、未だ一貫した見解は得られておらず (長内・古川, 2005), 宗教から発展した forgiveness は、心理学研究の面からも多くの研究者によって解釈がなされてきている。英和辞典では, forgiveness とは、寛容さ (心の広くゆるやかなこと), 寛大さ (寛容でよく人をゆるし受け入れること, 咎めだてしないこと) と訳されている。

長内・古川 (2005) によれば, Thompson & Snyder (2003) は, forgiveness を「自分を傷つけた相手やできごと, 状況に対する認識の再構成つまり, それらに対する考え, 感情または行動をネガティブなものからニュートラル, もしくはポジティブなものへと変化させた結果」と定義している。

また, 石川・濱口 (2007) は, 「知覚され

た被害, 侵害によって生じた反応を, ネガティブなものからポジティブ, ニュートラルなものに意識的に変化させようとする認知的傾向」と定義し, forgiveness を「ゆるし傾向性」と呼び, ゆるし (forgiveness) を個人の傾向性レベルで捉えている。これは, ゆるし (forgiveness) と心身の健康の関連を検討するうえで, 傾向性レベルでゆるし (forgiveness) を捉えようとするアプローチが有効であるという Tomson ら (2005) の考えに基いているという。これにより, 本研究でもゆるしを個人の一定の傾向 (特性) として取り扱うこととする。

ゆるし (forgiveness) の対象は, 大きく自己と他者に分けられ, 先行研究より精神的健康との関連, 対人関係修復に役立つことが報告されている。特に自己へのゆるしに関して, Mauger, et al. (1999) は, 他者に対するゆるしに比べ, 自己に対するゆるしの方が, 抑うつ, 不安, 怒りなどのメンタルヘルスとより強い関連を示すことを報告している (長内・古川, 2005)。石川・濱口 (2007) の中高生を対象としたゆるし研究においても, 他者へのゆるしは, 身体的攻撃・関係性攻撃といっ

1) 金城学院大学人間科学部 2) 浜松市

た外在化問題と、自己へのゆるしは、抑うつ・不安といった内在化問題との間により強い負の相関が認められたことを報告しており、自己へのゆるしと他者へのゆるしというゆるしの対象によって、その影響は異なっている。

これらの対象を包括的に捉え、ゆるしについて検討を進めていくことで、対人トラブルの緩和やセルフケア、さらには、いじめ予防などを含む教育現場への介入も望まれる。

しかし、こういったゆるしに関する国内での研究は海外に比べて少なく、明らかにされていない点が多い。ゆるしは、心身の適応の促進に役立つとされているが、そのためにはゆるし自体の促進の要因を検討する必要があるだろう。石川・濱口(2007)は、ゆるしを促進させる環境的条件や個人内要因が明らかにされてこそ、ゆるしを促進させる教育や介入方法の開発につながるものと考えられると述べている。そこで、本研究では、大学生を対象とする青年期後期に焦点を当てて、ゆるしを促進させる個人内要因や環境的条件、そしてそれらがどのように影響を及ぼしているのかを検討する。

青年期後期である大学生は、多様な対人関係を築く時期であり、親のみならず一層、友人や異性と深く関わるようになる。青年期の対人関係について関与しているものとして、ボウルビィ(Bowlby)の愛着理論に注目する。

ボウルビィの愛着理論では、乳幼児期において形成される母親との愛着関係がその後の対人関係に影響を及ぼすと考えられている。これは、内的作業モデル(Internal Working Models, 以下IWMと略す)と呼ばれ、母親との愛着関係はその人の心的表象として内在化し、その後は長期に渡って維持するとしている。加えてIWMは、他者は自分に応じてくれる、信頼できる存在かという側面と自分は他者に応じてもらえるような信頼できるもの

かという側面の2つの側面から成っている(山岸, 2000)。前者がその人の“他者観”を表し、後者がその人の“自己観”を表す。IWMは、その人が対人関係において、その出来事をどのように体験したかというその人の認知による主観的なものである。

そして、この概念によって青年期や成人期の恋愛を対象とした愛着スタイル研究が、多くの研究者によって進められてきた。

Brennan et al. (1998)は、今まで開発された14の愛着スタイル尺度にもとづき2次元・4分類モデルの“親密な対人関係体験尺度(Experiences in Close Relationships inventory, 以下ECRと略す)”を作成した(中尾・加藤, 2004b)。この愛着スタイル尺度は、重要な他者から見捨てられること、愛されないことに対する不安を示す“見捨てられ不安”と自己を頼りとして他者との情緒的つながりを好まない“親密性の回避”の2次元により高低合わせて4つのタイプに分けられる。見捨てられ不安と親密性の回避がともに低いタイプが「安定型」、見捨てられ不安が高く親密性の回避が低いタイプが「とらわれ型」、見捨てられ不安が低く親密性の回避が高いタイプが「拒絶型」、見捨てられ不安と親密性の回避がともに低いタイプが「恐れ型」に分類されている。そして、この“見捨てられ不安”が高いということが、“自己観”がネガティブであるということであり、“親密性の回避”が高いということが“他者観”がネガティブであるということである。

ボウルビィの理論による乳幼児期の母親との愛着関係が対人関係モデルとしてその後も維持し続けるという考えは、青年期や成人期以降の対人関係を考えるうえで深く関わっており、成人愛着研究の発展を進めているのである。

II. 目的

上述の先行研究に基き、本研究においてはゆるしと愛着スタイルとの関連を検討することとする。ゆるしと愛着スタイルとの関連を検討した研究は近年行われてきており、Burnette et al. (2007) は、見捨てられ不安と親密性の回避がともに肯定的であると、他者へのゆるしが高くなることを示した（沼田・今野, 2014）。

しかし、ゆるしを促進させる要因としては、愛着スタイルが直接影響を及ぼすだけではなく、その他の変数を介してゆるしに影響を及ぼす可能性も考えられる。つまり、愛着スタイルが対人関係の方略パターンとして機能し、ある変数に影響を与えることで、ゆるしにも影響を及ぼすのではないかということである。そこで、本研究ではその変数として、自尊感情と共感性をとりあげる。これらは既にいくつかの研究で愛着との関連性が検討されているが、ゆるしについても、McCullough et al. (1998) によって共感性と他者に対するゆるしは高い相関関係にあることが指摘されており（末藤・岡本, 2014）、自尊感情に関しても、自己に対する評価をどの程度受容できるかというものであることから、ゆるしとの関連がみられると予測できる。また、Hebl & Enright (1993) や Freedman & Enright (1996) が行ったゆるしの心理臨床的介入による検討において、ゆるしの介入後には被害者の自尊心や生活満足度が高まった（高田・大淵, 2009）との報告から、ゆるしと、自己に対する評価を示す変数には関連があるといえる。そこで、本研究では、自尊感情を自己に対する評価の変数として使用することとする。

以上のことから、先行研究からは愛着と自尊感情、共感性およびゆるしの間には、各々関連があることがうかがえるが、これら変数が具体的には、どのような関係性であるかは

明確にされていない。ゆるしを促進させる要因としてこれら変数がどのようにゆるしに影響を与えるのかを検討することが必要であると考える。

また、ゆるし研究は、他者に対するゆるしに関する研究が先行して検討されてきたことにより、自己に対するゆるしへの知見が比較的少ないのが現状である。

そこで本研究では、まず各変数の相関を確認した上で、ゆるしを促進させる個人内要因として愛着スタイルとの関連を検討する。具体的には、ゆるしと愛着スタイルとの関連性において、自尊感情と共感性が媒介変数としてつながりがあるかを検討する。前述したように、愛着スタイルは幼少期から獲得していった対人関係の方略パターンといえ、それが機能することで、ゆるしに対して直接影響を及ぼすだけではなく、その他の変数を介してゆるしに影響を及ぼす可能性も考えられる。よって、愛着スタイルがどのように自尊感情と共感性に影響を与え、それがゆるしへどのように影響させるのか明らかにすることが目的である。特に自尊感情は、見捨てられ不安から自己へのゆるしへ媒介し、共感性は、親密性の回避から他者へのゆるしへ媒介すると考えられる。これは、愛着の自己観と対応する見捨てられ不安が、自己の評価に関する変数の自尊感情を介して自己へのゆるしへ影響を与えるという予測であり、一方、愛着の他者観と対応する親密性の回避は、他者への関心などが必要とされる共感性を介して他者へのゆるしへ影響を与えるという予測である。仮想パスをFigure1に示す。

III. 方法

調査対象 名古屋市内の女子大学人間科学部の1年生から4年生の女子学生190名（平均年齢 19.8歳）を調査対象とした。

調査時期 2015年9月下旬であった。

調査方法 大学講義内、個別配布による質問紙調査を実施し、回答を求めた。

調査内容 調査内容は以下の通りであった。

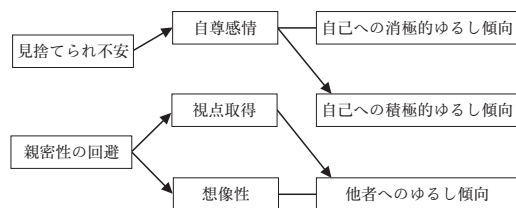


Figure 1 仮想パス

1) フェイスシート (学部, 学科, 学年, 年齢を記入)

2) 質問紙

①**ゆるし傾向性尺度** (石川・濱口, 2007) : ゆるしの傾向を測定する尺度23項目を使用した。この尺度は、「以前、自分に嫌な事をした相手にも、親切にしようと思う」「他の人から嫌な事をされたら、やり直す方法を考えてしまう (逆転)」等の“他者へのゆるし傾向” (10項目) と「自分の失敗のことで、いつまでも悩むことはない」「思うように上達しないことがあると、自分を責め続けてしまう (逆転)」等の“自己への消極的ゆるし傾向” (8項目)、「何か失敗したとしても、自分には他にいいところがあると考える」「失敗しても一生懸命頑張った結果なら自分をほめるようにしている」等の“自己への積極的ゆるし傾向” (5項目) の3因子で構成されている。これらの項目について「いいえ (1点)」、「どちらかといえばいいえ (2点)」、「どちらかといえばはい (3点)」、「はい (4点)」の4件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。

②**ECR-GO 日本語版** (Brennan et al., 1998; 中尾・加藤, 2004) : 一般他者への愛着を測定する尺度25項目 (“見捨てられ不安” “親

密性の回避” の2因子で構成され、全30項目から見捨てられ不安の因子負荷量50以下の5項目を削除した。)を使用した。これらの項目について「全くあてはまらない (1点)」、「あまりあてはまらない (2点)」、「どちらともいえない (3点)」、「ややあてはまる (4点)」、「とてもあてはまる (5点)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。(なお、比較的長い項目については意味が変わらない程度に修正した: 項目6, 項目8, 項目24)

③**多次元共感性 (MES)** (鈴木・木野, 2008) : 多次元的アプローチにおける共感性を測定する尺度から認知的側面である“視点取得 (他者の心理的観点をとろうとする傾向)”と“想像性 (自分を投影して想像する傾向)”を採用した (以下認知的共感性とする。)。各5項目であった。これらの項目について「全くあてはまらない (1点)」、「あまりあてはまらない (2点)」、「どちらともいえない (3点)」、「ややあてはまる (4点)」、「とてもあてはまる (5点)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。

④**自尊心尺度** (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982) : Rosenbergにより作成された自尊心尺度を山本・松井・山成が邦訳した尺度10項目を使用した。これらの項目について「あてはまらない (1点)」、「ややあてはまらない (2点)」、「どちらともいえない (3点)」、「ややあてはまる (4点)」、「あてはまる (5点)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。

IV. 結果

1) **尺度の検討 (因子分析・信頼性)** まず、因子構成の確認のため、1因子構造である自尊心尺度を除く3尺度について因子分析 (主因子法, バリマックス回転) を行った。

①ゆるし傾向性尺度の因子分析結果 固有値の推移と因子の解釈可能性から最終的に3因子構造が妥当であると判断した。その結果、原尺度(石川・濱口, 2007)にほぼ準じた項目群がそれぞれ因子としてまとまったため、第1因子を“他者へのゆるし傾向”(項目例: 以前、自分に嫌な事をした相手にも、親切にしようと思う)、第2因子を“自己への消極的ゆるし傾向”(項目例: 「思うように上達しないことがあると、自分を責め続けてしまう(R)」)、第3因子を“自己への積極的ゆるし傾向”(項目例: 何か失敗したとしても、

自分には他にいいところがあると考える)と原尺度の因子名をそのまま採用した(なお、項目「何か失敗したとしても、いつまでもよくよすることはしない」のみ、因子負荷量と因子ごとの項目数のバランスから原尺度の“自己への消極的ゆるし傾向”ではなく“自己への積極的ゆるし傾向”にまとめた)。因子分析結果をTable 1に示す。

②ECR-GO 日本語版の因子分析結果 固有値の推移と因子の解釈可能性から最終的に2因子構造が妥当であると判断した。その結果、原尺度(中尾・加藤, 2004)に準じた項目群

Table 1 ゆるし傾向性尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3
F1: 他者へのゆるし傾向 ($\alpha = .88$)			
27. 以前、自分に嫌な事をした相手にも、親切にしようと思う	.81	-.04	.11
28. 以前、自分に嫌な事をした人にも、今はやさしくしようと思っている	.70	-.02	.20
20. 以前、自分に嫌な事をした相手と仲良くする気にならない(R)	.69	.02	-.12
2. 以前、自分を傷つけた相手でも、その人との関係がよくなる方法を考える	.68	-.06	.17
15. 以前、自分に嫌な事をした相手でも、困っていれば助けようと思う	.67	.00	.15
39. 以前、自分に嫌な事をした相手は、今もひどい人だと思ってしまう(R)	.66	.25	-.01
45. 自分に嫌な事をした人を恨み続けないようにしている	.65	.04	.05
35. 自分に嫌な事をした相手の批判を、いつまでもしないようにしている	.57	.10	.20
33. 自分を傷つけた相手には、何か嫌な事が起きればいいと思う(R)	.54	.34	-.05
6. 他の人から嫌な事をされたら、やり直す方法を考えてしまう(R)	.51	.12	.01
F2: 自己への消極的ゆるし傾向 ($\alpha = .85$)			
4. 思うように上達しないことがあると、自分を責め続けてしまう(R)	.05	.81	-.02
42. 何か失敗すると、自分はダメな人間だと思ってしまう(R)	.00	.75	.18
17. うまくいかないことについて、自分を責め続けてしまう(R)	.06	.73	.23
29. 何か出来ないことがあると、いつまでも自分に腹を立ててしまう(R)	-.01	.70	.10
11. 以前の自分の失敗の事を考えると、今でも落ち込んでしまう(R)	.08	.70	.16
34. 自分の失敗のことで、いつまでも悩むことはない	.07	.49	.40
40. 自分の努力が無駄になってしまったら悔しくて仕方がないと思う(R)	.18	.43	-.05
F3: 自己への積極的ゆるし傾向 ($\alpha = .84$)			
46. 何か失敗したとしても、自分には他にいいところがあると考える	.02	.09	.84
7. 失敗しても一生懸命頑張った結果なら、自分をほめるようにしている	-.02	-.00	.70
25. 努力が無駄になっても、その努力は自分のためになると考えられる	.21	.10	.69
19. 何か失敗したとしても、自分は頑張ったと考えるようにしている	.03	.21	.67
1. 何か失敗したとしても、それは自分のためになると考えるようにしている	.28	.05	.59
56. 何か失敗したとしても、いつまでもよくよすることはしない	.09	.42	.58
負荷量平方和	4.45	3.60	3.25

注) Rは逆転項目を示す。

がそれぞれ因子としてまとまったため、第1因子を“見捨てられ不安”（項目例：私は、見捨てられるのではないかと心配だ）、第2因子を“親密性の回避”（項目例：私は人に心を開くのに抵抗を感じる）と原尺度の因子名をそのまま採用した。因子分析結果をTable 2に示す。

③認知的共感性の因子分析結果 固有値の推移と因子の解釈可能性から最終的に2因子構造が妥当であると判断した。その結果、原尺

度（鈴木・木野，2008）に準じた項目群がそれぞれ因子としてまとまったため、第1因子を“視点取得”（項目例：常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている）、第2因子を“想像性”（項目例：面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する）と原尺度の因子名をそのまま採用した。因子分析結果をTable 3に示す。

各因子の信頼性 各因子の信頼性について

Table 2 ECR-GOの因子分析結果

項目	F1	F2
F1：見捨てられ不安（$\alpha = .90$）		
2. 私は、見捨てられるのではないかと心配だ	.84	.09
14. 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する	.75	.03
6. 私が人のことを大切に思うほどには、人が私を大切に思っていないのではないかと心配する	.70	.17
8. 私は、知り合いを失うのではないかと心配している	.68	.18
4. 私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している	.64	.03
22. 私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない(R)	.62	.08
16. 私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう	.62	.06
24. 私は、人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、きっと気が動転して悲しくなったり腹が立ったりする	.61	-.00
30. 私は、私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう	.56	.09
26. 私が親密になりたいと望むほどには人は私と親密になりたいと思っていないと思う	.55	.27
32. 私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする	.53	.08
18. 私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言うてくれることが必要だ	.53	-.03
12. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう	.53	.00
F2：親密性の回避（$\alpha = .87$）		
9. 私は人に心を開くのに抵抗を感じる	.17	.69
31. 私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない(R)	.13	.67
29. 私は人に頼ることに抵抗がない(R)	.10	.66
15. 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない(R)	.08	.66
17. 私は人とあまり親密にならないようにしている	.23	.63
25. 私は、人に何でも話す(R)	-.01	.60
27. 私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う(R)	-.16	.57
23. 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない	.11	.57
3. 私は、人と親密になることがとてもこちよい(R)	-.07	.53
19. 私は比較的容易に人と親密になれると思う(R)	.39	.53
1. 心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない	.10	.49
21. 私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う	.04	.45
	負荷量平方和	5.53 4.38

注) Rは逆転項目を示す。

Table 3 認知的共感性の因子分析結果

項目	F1	F2
F1：視点取得 ($\alpha = .76$)		
4. 常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている	.80	.10
9. 自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする	.75	.13
17. 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする	.69	.04
10. 相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない(R)	.51	-.04
23. 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのか考えながら話を聞く	.40	.30
F2：想像性 ($\alpha = .73$)		
11. 面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する	.06	.81
24. 自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする	.04	.75
5. 空想することが好きだ	.11	.51
25. 小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない(R)	-.05	.50
18. 感動的な映画を見た後は、その気分にならなくても浸ってしまう	.15	.42
負荷量平方和	2.13	2.02

注) Rは逆転項目を示す。

Table 4 各変数の平均値, 標準偏差, α 係数および変数間の相関

	Mean	SD	α 係数	2	3	4	5	6	7	8
1. 親密性の回避	2.76	.65	.87	.25**	-.01	-.11	-.16*	-.16*	-.37**	-.42**
2. 見捨てられ不安	2.53	.67	.90	—	.20**	-.12	-.23**	-.57**	-.38**	-.54**
3. 想像性	3.57	.72	.73	—	—	.19**	-.14	-.30**	.03	-.17*
4. 視点取得	3.75	.57	.76	—	—	—	.40**	-.02	.15*	.04
5. 他者へのゆるし傾向	2.53	.60	.88	—	—	—	—	.20**	.23**	.20**
6. 自己への消極的ゆるし傾向	2.18	.62	.85	—	—	—	—	—	.39**	.59**
7. 自己への積極的ゆるし傾向	2.77	.59	.84	—	—	—	—	—	—	.59**
8. 自尊感情	2.97	.70	.87	—	—	—	—	—	—	—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ゆるし傾向性5.6.7 (4件法) 以外の変数はいずれも5件法で測定した

確認するため、因子ごとに α 係数を算出したところ、いずれも十分な信頼性が認められた (Table 4)。

2) 各下位尺度間の関連について 以上の因子分析結果に基づき、各尺度の平均値を下位尺度得点として算出し、相関係数を算出した (Table 4)。

① 成人愛着スタイルとゆるし傾向性との関連 まず、“親密性の回避”は、“自己への積極的ゆるし傾向”との間に有意な負の弱い相関が認められたが ($r = -.367, p < .01$)、“他者へのゆるし傾向”との間には相関がみられな

かった。“見捨てられ不安”は、“他者へのゆるし傾向”との間に有意な負の弱い相関 ($r = -.226, p < .01$)、“自己への消極的ゆるし傾向”との間に有意な負の中程度の相関 ($r = -.565, p < .01$)、“自己への積極的ゆるし傾向”との間に有意な負の弱い相関が認められた ($r = -.375, p < .01$)。

② 認知的共感性とゆるし傾向性との関連 “想像性”は、“自己への消極的ゆるし傾向”との間に有意な負の弱い相関が認められた ($r = -.301, p < .01$)。“視点取得”は、“他者へのゆるし傾向”との間に有意な正の弱い相

関が認められた ($r=.398, p<.01$)。

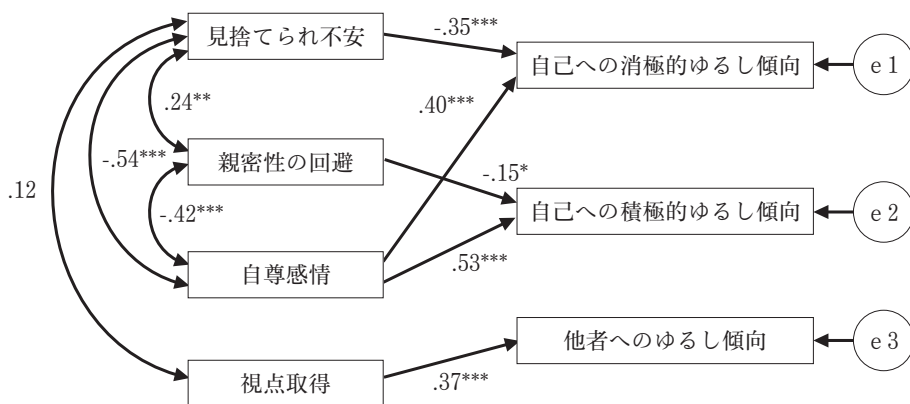
③**自尊感情とゆるし傾向性との関連** “自尊感情”は，“自己への消極的ゆるし傾向との間に有意な正の中程度の相関” ($r=.589, p<.01$)，“自己への積極的ゆるし傾向”との間に有意な正の中程度の相関 ($r=.592, p<.01$) が認められた。

④**その他尺度間の関連** “親密性の回避”は，“自尊感情”との間に有意な負の相関が認められた ($r=-.417, p<.01$)。“見捨てられ不安”は，“想像性”との間に有意な正の相関 ($r=.204, p<.01$)，“自尊感情”との間に有意な負の相関 ($r=-.544, p<.01$) が認められた。

3) **成人愛着スタイル，ゆるし傾向性，認知的共感性，自尊感情のパス解析** 成人愛着スタイルが認知的共感性や自尊感情を媒介し，ゆるし傾向性に影響を与えるという仮説にもとづき構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った。具体的には，仮説に従って，第一水準を成人愛着スタイルの親密性の回避と見捨てられ不安，第二水準を認知的共感性

(想像性，視点取得)と自尊感情，第三水準をゆるし傾向性(自己への消極的ゆるし傾向，自己への積極的ゆるし傾向，他者へのゆるし傾向)とし，解析を行ったところ，モデルの適合度が十分な値を示さなかった。

変数間の相関から，想像性と他者へのゆるし傾向の関連性は認められないため，想像性をモデルから削除することとした。また，自尊感情は，成人期愛着スタイルによって影響を受けるというよりも，成人期愛着スタイルの形成と同時に育まれていると考えられる。そこで，第一水準と第二水準をまとめ，第一水準を成人愛着スタイル(親密性の回避，見捨てられ不安)，認知的共感性(視点取得)，自尊感情，第二水準をゆるし傾向性(自己への消極的ゆるし傾向，自己への積極的ゆるし傾向，他者へのゆるし傾向)とし，再度解析を行った。有意でないパスを削除し，最終的にFigure 2に示すモデルを採用した。モデルの適合度は十分な値を示した(CFI=.959,GFI .963,AGFI=.914,RMSEA=.077)。



CFI=.959,GFI.963, AGFI=.914, RMSEA=.077

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

Figure 2 パス解析の結果

V. 考察

本研究における仮説を検証するために、愛着とゆるし傾向性について、認知的共感性と自尊感情を介するようにパス解析を用いて検討した。その結果、愛着は認知的共感性と自尊感情を介せず、直接ゆるし傾向性へパスが示され、仮説を支持するものとはいえなかった。しかし、認知的共感性の視点取得から他者へのゆるし傾向へと至るパスが引かれているなどといった、部分的に仮説に沿った結果が出ていることから、最終的に採用したパス解析結果をもとに、各変数の関連についてさらに細かく考察していくことが必要であると考える。以下、今回仮説が支持されなかった理由も検討しつつ、各変数の関連を考察する。

1) **見捨てられ不安との関連** パス解析による見捨てられ不安が高いと自己への消極的ゆるし傾向が低下しやすいという結果は、沼田・今野(2014)の研究結果とも合致した。しかし、見捨てられ不安から自己への積極的ゆるし傾向へはパスが引かれなかったことは、沼田・今野(2014)の研究結果とは異なる結果となった。そもそも、自己へのゆるしが2因子に分かれることについて、石川・濱口(2007)は、消極的なゆるしと積極的なゆるしには、日本人の自己批判傾向な特徴から、質的な違いがみられる可能性を指摘している。つまり、自己批判傾向のある人にとって自己に対するネガティブなものを維持しないように意識することは、その批判を緩めるような感覚であるのに対し、ネガティブなものからポジティブなものに変化させることは、批判しているものを好意的に再評価することであり、新しく別のものとして捉えなおさなければならぬ感覚といえる。よって、自己を積極的にゆるすことは、自己を消極的にゆるすことよりも難しく、意識的に行われにくいといえる。そして見捨てられ不安が高い人は、

自己評価が低いため、被害、侵害を感じる場面に出会った時には、消極的なゆるしを選択しやすいと考えられる。今回の結果では、見捨てられ不安から自己への積極的ゆるし傾向には影響がみられなかったが、見捨てられ不安が高い人にとっては、ネガティブなものを維持しないようにするだけでも十分なゆるし傾向があったといえる。

2) **親密性の回避との関連** 本研究では、親密性の回避と他者へのゆるし傾向との間には関連がみられなかった。これは、仮説が支持されず、沼田・今野(2014)とも違う結果となった。今回の調査対象者が女子学生のみであるということを踏まえると、女性には男性より周囲との関係性を維持しようとする傾向があり、加えて、女子大学という女子のみのコミュニティの中で学校生活をしていることから、他者をゆるすことは、円滑に対人関係を進めるうえで重要なスキルであり、それによって親密性の回避との関連がみられなかったのではないかと考える。石川・濱口(2007)の研究でも、他者へのゆるし傾向は男子より女子のほうが高いことが報告されており、性差による影響があったと考えられる。一方、そもそも親密性の回避が高い人は、他者への関心が乏しいため、ゆるすという、より高次の考えにまで至らなかったのではないかとこの可能性も考えられる。他者へのゆるしについて、上田ら(2010)は、西欧が「個人主義文化」であるのに対し、日本人は、「集団主義文化」であり、その文化的特徴から関係志向性が指摘され、日本人のゆるしには、関係修復や社会的調和の回復がゆるしの主要な目的となることを示唆している。つまり、日本人の他者へのゆるしには、他者との関わりを重んじる傾向から、関係修復という目的が主に含まれているのである。しかし、もともと他者との関わりを好まない人にとっ

て、この関係修復を求めることはなく、他者をゆるすための動機が得られにくいのではないかと考えられる。さらには、その対象をゆるすかどうか考えようとする場合、ゆるす対象に関心を持ち続けなければならないことを考えると、他者への関心が乏しい人は、他者への関心が継続されにくく、ゆるすかどうかの判断をする思考にまで至りにくいと考えられる。以上のことから、他者への関心が乏しく関わりを好まないとされる親密性の回避と他者へのゆるしには関連がみられなかったと考えられる。

3) 自尊感情との関連 自尊感情が高い人は、自己に対して消極的にも積極的にもゆるしやすくなるという結果は、石川・濱口(2007)の調査結果とも合致するもので、本研究の仮説も部分的に支持するものであった。自尊感情とは、自己に対する肯定的な評価のことであり、自己を肯定的に捉えることができる人ほど、自己へのゆるし傾向が高くなりやすいといえる。

また、自尊感情から他者へのゆるし傾向に影響がみられなかったことについて、自己に対して肯定的であっても、他者をゆるせるかどうかには影響しないことがわかった。つまり、他者に傷付けられる経験をした際、もともとの自尊感情が下がる可能性はあったとしても、それが直接的に他者をゆるすかどうかの判断には結びつかないということである。自分を認めることができるから他者がゆるせるようになるわけではなく、他者をゆるすには、自己視点ではなく、客観的な視点が必要ではないかと考えられる。このような視点とは、次項の認知的共感性と重なる部分ともいえるであろう。

4) 認知的共感性(視点取得)との関連 認知的共感性(視点取得)が高いと他者をゆるしやすくなるという結果は、末藤・岡本

(2014)の調査結果と合致するもので、本研究の仮説も部分的に支持するものであった。また、パス解析の際、想像性からゆるしへのパスが得られなかった。これは想像性が「面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する(項目5)」といった自己を投影して想像する傾向であり、自己指向的であることから、他者を正確に理解しようとする認知的共感性としては機能しなかった可能性が考えられる。

一方、視点取得が他者へのゆるし傾向以外とは因果関係がなかったことから、認知的共感性は愛着や自尊感情などの人格形成へと影響される変数とは異なったものであり、自己視点とは別の客観的な視点からの作用が働くことにより、ゆるし傾向性に影響を与えている可能性があると考えられる。つまり、他者へのゆるし傾向がみられるには、その人のもともとの性格や思考ではなく、新たにスキルとして獲得されるような認知的共感性が必要であると考えられる。

加えて、今回の調査の特徴として、調査対象者の大部分が、対人援助領域に関心をもつ学生たちであった点から、他者へのゆるし傾向がより高くみられたのではという点は考慮する必要がある。

VI. まとめと今後の課題

本研究では、ゆるしと愛着スタイルとの関連性において、自尊感情と共感性が媒介変数としてつながりがあるかを検討した。その結果、自尊感情と共感性は媒介せず、愛着と共に直接的な影響があることが示された。具体的には、自己への消極的ゆるし傾向には、見捨てられ不安が負の影響、自尊感情が正の影響を与えており、自己への積極的ゆるし傾向には、親密性の回避が負の影響、自尊感情が正の影響を与え、他者へのゆるし傾向には、

視点取得が正の影響を与えていることがわかった。

今回の結果より、愛着スタイルはそもそも乳幼児期における母親との関わりを発達していく中で対人関係パターンとして内在化したものであり、この母親との愛着体験は、この発達過程においてそのほかの変数と相互に関わり、愛着スタイルとして確立していくものであるため、自尊感情と共感性が愛着とゆるし傾向性を媒介しなかったことについて、愛着がさまざまな変数に影響を一方的に与えているというよりは、今回の自尊感情や共感性といった変数と愛着とが相互に関連しながらその人の対人関係方略として機能していることがわかったといえる。

自己へのゆるし傾向に関して、自己観と関連のある見捨てられ不安が消極的ゆるし傾向に対して負の影響があり、一方で他者観と関連がある親密性の回避が積極的ゆるし傾向に負の影響がみられたことは、自己へのゆるし傾向から分かれたこの2因子が異なるものから影響を受け構成されていることが明らかになったといえる。これは既述したように、消極的なゆるしと積極的なゆるしには、質的な違いがみられる可能性があるとする石川・濱口(2007)の指摘と同じであり、今後、日本でのゆるし研究を行う際には、消極的ゆるし傾向と積極的ゆるし傾向の質的な違いを考慮した検討が必要であると考えられる。

また、共感性を扱うにあたって、認知的共感性に焦点を当てて検討を行ったが、これは、他者をゆるそうとする時には、他者の心理状態に対して体験的な感情を抱く情動的共感性は、起こりにくいと考えたからである。その結果、自己視点ではなく他者の心理的視点をとろうとする視点取得が影響を及ぼすことがわかった。これにより、単に共感性が他者へのゆるし傾向に影響を及ぼしているというこ

とでなく、共感性の中でも認知的側面をもつ部分がゆるし傾向に影響を与えているといえる。加藤・谷口(2009)は、ゆるしには、必ずしも慈愛や憐れみは必要ではないと述べており、そこからも慈愛、憐れみといった同情的なものである情動的共感性は、ゆるしとは関連しにくいと考えられる。今回は、多次元的共感性を測る尺度から共感性を採用したが、認知的共感性に焦点を当てた尺度を用いるなどして、さらに詳しく調べる必要があると考えられる。

今回行った調査では、女子大学に在籍する援助系の学部の学生を対象とした。それにより、他者へのゆるし傾向の促進に影響が出た可能性が考えられる。特に親密性の回避から他者へのゆるし傾向への影響がみられなかったことは、女子大学の学生特有の結果と考えられる。つまり、他者との関係性を維持する傾向のある女性のみコミュニティでは、愛着スタイルに関係なく他者へのゆるし傾向が促進されるという環境的な要因が影響したと考えられる。

また、対象者を愛着スタイルの「安定型」「とらわれ型」「拒絶型」「恐れ型」の4つの群に分け、それらとゆるし傾向性との関連をさらに細かく検討することで、いずれも各々の特徴を持つ4つの型によって、より愛着とゆるしとの関係性が明らかになると考えられる。

そのほか、青年期や成人期以降のゆるし傾向性において、例えば入学したばかりの大学1年生とさまざまな人と関わる機会を持つ大学4年生、または社会に出て働き始めた社会人ではゆるし傾向性に違いがみられる可能性が考えられ、発達の視点でもゆるし傾向性を検討する余地があるだろう。

これらを踏まえると、今後の課題としては、自己への消極的ゆるし傾向と積極的ゆるし傾

向は、異なるゆるし傾向として、ひとつひとつ細かく扱っていく必要があること、他者へのゆるし傾向と共感性との関連を検討する際は、共感性の認知的側面に焦点を当てて検討をすること、もとより調査対象をもっと広く一般的に行うこと、それに加えて、女性のみのコミュニティの中では、他者へのゆるしが促進されるといったことが、環境的な要因として認められるかを他の対象者でもいえるか再検討し、性差による影響の違いも明らかにすることが必要であり、そして発達的な視点でゆるし傾向性を捉えていくことで、ゆるしを促進させる要因を探る研究がさらに進められることが望まれる。

文献

- 石川満佐・濱口佳和 (2007). 中学生・高校生におけるゆるし傾向性と外在化問題・内在化問題との関連の検討 教育心理学研究 55, 526-537.
- 加藤司・谷口弘一 (2009). 許し尺度の作成の試み 教育心理学研究 57, 158-167.
- 今野仁博・小川俊樹 (2012). 認知的共感性と成人愛着の関連について—愛着回避に着目して— 筑波大学心理学研究 43, 97-107.
- 宮崎弦太・池上知子 (2015). 被拒絶場面における関係修復行動の促進要因としてのコミットメントと受容期待：媒介過程の差異と愛着傾向による調整過程 社会心理学研究 30, 164-174.
- 中尾達馬 (2010). 面識があまりなくとも、他者の愛着スタイルを認識することは可能なのか？—愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の一致度の検討 パーソナリティ研究 19, 146-156.
- 中尾達馬・加藤 和生 (2004a). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究 5, 19-27.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004b). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究 75, 154-159.
- 沼田真美・今野裕之 (2014). ゆるしと成人愛着スタイルとの関連 パーソナリティ研究 23, 113-115.
- 長内綾・古川真人 (2006). 日本語版Heartland Forgiveness Scaleの開発 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 8, 51-57.
- 酒井厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究 9, 59-70.
- 末藤尚代・岡本祐子 (2014). 大学生の特性としての許しと公正感の関連—道徳性の発達の観点から— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 13, 51-64.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究 56, 487-497.
- 高田奈緒美・大淵憲一 (2009). 対人葛藤における寛容性の研究：寛容動機と人間関係 社会心理学研究 24, 208-218.
- 戸田弘二・芳賀信太朗 (2013) 愛着システムの活性化と内的作業モデルの情報処理機能 北海道教育大学紀要 (教育科学編) 64, 53-69.
- 上田光世・山田幸恵・潮村公弘 (2010). 日本文化特性を反映したゆるし尺度の因子論的妥当性の検討 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 78.
- 若尾良徳 (2004). 青年のアタッチメントスタイルと不安喚起場面における行動との関連 パーソナリティ研究 12, 47-58.
- 山岸明子 (1994). 女子青年の内的作業モデルと過去から現在の対人的経験との関連 順天堂医療短期大学紀要 5, 52-63.
- 山岸明子 (2000). 内的作業モデル尺度の構造と4時点での変動—女子看護短大生を対象として— 順天堂医療短期大学紀要 11, 41-50
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山本真理子 (編) (2001). 心理学測定尺度集 I—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉 サイエンス社